

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：12606

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K21647

研究課題名（和文）泥絵（DOROE）の総合研究 - 都市史・美術史・文化財科学の手法から -

研究課題名（英文）The study of the paintings called "Doro-e"-approach from urban historical and art, scientific analysis-

研究代表者

水本 和美（MIZUMOTO, Kazumi）

東京藝術大学・大学院美術研究科・講師

研究者番号：80610295

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,100,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代から明治時代はじめ、「泥絵」として括られる絵画が制作された。浮世絵が広く海外に知られる一方、泥絵は、一部の研究者を除けば認知度が低い。代表者は、泥絵の中では比較的露出されてきた渡辺紳一郎氏の旧蔵コレクションの調査・購入の機会を得た。文献調査・観察調査のほか、自然科学的な手法による材料調査も実施した。これにより、油絵など西洋絵画等の技術との対比で、泥絵が必ずしも従来の「民画」としての位置付けにとどまらないことを材料や描画技法などから明らかにしうると考える。ガラス絵などとの比較も行い、材料や描画法などの知見を得た。泥絵の保存の検討から日本の個人住宅で保管される文化財の保存法研究に発展した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

科研費購入で、渡辺紳一郎氏の旧蔵コレクションが散逸をまぬかれた。美術・文化財の研究上の意義は深い。泥絵の観察と自然科学分析による材料技法の再検討から、これまでの「民画」という位置づけに対する新たな知見を得た。浮世絵に比して認知度の少ない泥絵に学術的な位置づけを与え、海外を含めた露出を増やす根拠となる。また、泥絵の保存性を検討するなか、夏場は高温多湿・冬場は低温乾燥の日本の環境下での個人コレクションを、個人住宅でどう保存しえるかに関して知見を得た。これは、文化財すべてに対して博物館・美術館の収蔵庫環境を保障できないなか、個人所有のコレクションを後世に繋ぐために、社会的意義の深い成果となった。

研究成果の概要（英文）：The group of paintings called "Doro-e" were produced from the Edo through the beginning of the Meiji periods. Doro-e is little recognized, except for some researchers in specific academic fields of studies. The principal researcher of this Doro-e project(study) had the opportunity to obtain and investigate the private collection of Mr. Shinichiro Watanabe, which led to the scientific research on materials used for Doro-e in addition to literature surveys. The result indicates that Doro-e is not necessarily positioned as conventional "folk paintings" but have a new aspect in the choice of colorants as well as its painting technique and materials and the drawing for perspectives in comparison with European oil paintings. We also compared with glass paintings techniques and materials. Our methods that we studied for Doro-e will contribute many collectors who live in JAPAN and cannot build the well-equipped storage, are able to improve the environment for their collections by our methods.

研究分野：考古学、考古科学、博物館学

キーワード：泥絵 渡辺紳一郎氏旧蔵コレクション 色材 自然科学分析 ガラス絵 個人コレクション 資料保存 遠近法（パースペクティブ）

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本絵画史上、泥絵として知られる一連の絵画は、江戸時代後期の日本絵画の中では、西洋画との接点や、色彩のある風景画として非常に特徴的なものであるにもかかわらず、一部のコレクターや研究者を除けば、浮世絵などに比較して、一般にはあまり知られてこなかった。そこで、本研究では、都市史や絵画史、江戸東京の景観変遷と絵画モチーフとしての対象選択の意味、19世紀の西洋画や初期の洋画との技法・材料比較、悉皆的な材料学的検討、泥絵の保存性に関する予備調査を含め「泥絵」に関する初の総合的研究を行う。浮世絵から油彩画への転換期に存在した「泥絵」という庶民の風景画を世界に認知してもらう機会として、萌芽研究で挑戦したい。東京の風景が新たに変わりゆく「東京 2020」に近い時期に、報告書兼図録を刊行・展示展開などの活用への展望を可能とするための端緒としたい。

2. 研究の目的

本研究は、「泥絵(DOROE)の総合研究-都市史・美術史・文化財科学の手法から-」と題して、近世後期の庶民の絵画「泥絵」について、都市史・絵画史・文化財科学・予防保存の観点から新たな研究分野として開拓すべく、総合研究の端緒として開始する。主な研究対象は「渡邊紳一郎氏旧蔵コレクション」とした。泥絵は、日本の絵画史の中では、江戸時代の浮世絵から明治時代の油彩画にいたる端境期に出現しており、その変遷には、日本絵画史上における西洋画の材料技法の影響を残した、重要な位置を占めていると考えている。本研究では、都市史や絵画史、江戸東京の景観変遷、絵画モチーフとしての対象選択の意味、19世紀の西洋画や初期の洋画との技法・材料比較、悉皆的な材料学的検討、泥絵の保存性に関する予備調査を含めた「泥絵」に関する初の総合的研究を開始することを目的とする。材料・テーマ・描写法の相互の関連性についても総合的な研究から探る試みであり、今後、泥絵(DOROE)というジャンルに光をあてるための布石とする。

3. 研究の方法

(1) 科研費メンバーと協力いただいた方々

本研究にあたっては、以下のチーム編成を行った。江戸の都市空間と変遷について研究してきた申請者(水本和美)を代表者とし、分担者には、分析科学の立場から、色材や絵画について研究実績のある一宮八重、田口智子が入る。なお、東京藝術大学の保存科学・修復油画の研究者からは、適切なタイミングでの指導・助言も受けることができた。

・水本和美：中近世、近代も射程に入れた都市史と陶磁器を専門に、陶磁器の自然科学分析や有機物の分析に共同研究実績がある。

・一宮八重：東京藝術大学大学院美術研究科保存科学研究室・教育研究助手(その後、美術研究科の研究員)。ニューヨーク州立大学、スミソニアン博物館群フリーア美術館、メトロポリタン美術館における実績を持ち、絵画材料の分析、絵画についての深い見識があるので、色材調査を担当した。

・田口智子：奈良女子大学を卒業後、東京藝術大学大学院で修士号・博士号を取得。教育研究助手を勤めたのち、現在は、東京藝術大学 国際文化財修復プロジェクト室(文化財保存修復センター準備室)特任研究員。主要な研究対象は金属材料で、これに付随して、色彩・発色に関する研究も進めている。本研究では、泥絵の自然科学分析、色材と保存性に関連した部分を担当した。

協力者・機関は下記である。

・降旗千賀子氏(元目黒区美術館、東京藝術大学客員教授):色材、絵画調査に関わること

・浜松市美術館:ガラス絵、泥絵の調査、同博物館の増井敦子氏をはじめとする、諸氏。

・このほか、東京藝術大学保存科学研究室、大学美術館、保存修復油画研究室、保存修復日本が研究室の各位には多大なるご教示とご支援を賜った。

(2) 研究対象

「渡邊紳一郎氏旧蔵コレクション」

同コレクションは、泥絵の中では、これまでも展示会等でもその一端が知られてきた、個人コレクターである渡邊紳一郎氏の蒐集品である。渡邊氏の没後に継承され、個人蔵となっていた泥絵を主体とする300点余りの絵画コレクションである。当初は、代表者が本研究のために所蔵者より借用し、調査研究を進めたが、所蔵者の急逝を機に、科研費にて購入した。なお、そのことで、泥絵の保存性に関して具体的に取り扱いながらの研究を行う運びとなった。

このほか、代表者らの研究に対して、アプローチをいただき、浜松市美術館の所蔵するガラス絵のコレクションに関わる調査の機会を得て、今後とも継続の方針である。

(3)研究手法とその進行

具体的な研究の手法と進行について書きに述べる。

泥絵の資料化

- ・デジタル画像の撮影と調書の作成（分類・大別・並べ替えは終了）
- ・泥絵の高精彩デジタル画像データ作成（作成中）
- ・泥絵データベース作成（市販のソフト利用）
- 泥絵のモチーフ・絵画表現に関する研究
- ・地域的視点（ビューポイントの解明を目指して）
- ・その他モチーフとの比較（特に関西系泥絵との比較）
- ・表現手法の研究、遠近法など
- 泥絵の材料科学的分析
- ・支持体としての紙材料
- ・顔料（土人形との比較も行う）
- 泥絵の保存方法の確立を射程とした予察的な研究
- ・泥絵の保存法の改善
- ・泥絵の保存環境の改善
- 渡邊伸一郎氏コレクション形成に関する考察
- ・コレクション全体観
- ・ヨーロッパにて当時収集可能であった作品を追う。C 渡邊伸一郎氏の足跡と交友。

4. 研究成果

(1)研究発表・文章化等、成果の公表

2019年の成果（研究会の開催）: 水本和美、ジラルデッリ青木美由紀 2019「トルコと江戸（江戸と江戸城）」トルコ在住の研究者であるジラルデッリ青木美由紀氏を招聘して『トルコと江戸』という研究会を開催した。この研究会で、本研究に関わる成果としては、遠近法のトルコ・イスタンブールの宮殿における使用について、西洋との出会い・交流と近代化というキーワードに対してトルコ・イスタンブールでは西洋はすでに内包されており、西洋化が同義であった日本の近代化とは様相を異にするという視点である。本研究会を受けて、ローマとイスタンブールで同種の会を行うという企画（2020年2月・3月を予定）があったが、2019年秋からのコロナ禍を受けて、実施にはいたらなかった。今後、機会があれば開催したいと考えている。

2020年の成果（研究発表）: 田口智子、一宮八重、水本和美、桐野文良 2020「泥絵「上の坂」の材料分析」日本文化財科学会 第36回大会（ポスター・アブストラクト）

2020年の成果（調査報告書の記載）: 水本和美・蔵品真理・一宮八重・塚田全彦・新免歳靖 2020「四谷一丁目遺跡出土の青色物質の自然科学分析と考察」『新宿区四谷一丁目遺跡 第3分冊（発掘調査報告書）』210-224頁

査読無し、DOIなし

2021年の成果（研究発表）:

水本和美 2021「江戸文化の研究と自然科学分析「ウルトラマリンブルー」（考古）と「泥絵」（絵画）～2つの研究を中心に～」第5回 文理融合シンポジウム「量子ビームで歴史を探る」

2021年の成果（活動報告）: 一宮八重・田口智子・水本和美 2022「個人所蔵資料の保管整備に向けた取り組み」『芸術資源保存修復センター活動報告書』東京藝術大学芸術資源保存修復センター

(2)各年度の調査研究内容と成果

このことについて、上に掲げた目標とともに示す。（本研究は、コロナ禍の渦中で行っており、感染拡大状況により、状況に応じたあるいは年度ごとに見直し・計画修正をはかった。特に、出張調査については大幅に見直しざるを得ず、これによって、転換した調査方法から新しい研究の芽も生まれることとなった。）

泥絵の資料化

- ・デジタル画像の撮影と調書の作成（分類・大別・並べ替えは終了）
- ・泥絵の高精彩デジタル画像データ作成（作成中）
- ・泥絵データベース作成（市販のソフト利用）

【平成31年度(2019)】計測データをとりながら、エクセル表に整理した。このとき、江戸泥絵、上方泥絵等のシリーズを確認した。なお、江戸泥絵にも複数のシリーズが存在する。この年次については、借用資料としての調査であり、並べ替えるなどの行為は行わなかった。これと並行して、管理簿をつくり、分析調査を進めることとした。ただし、はじめに科学分析を実施したのは、本科学研究費で分析の安全性と効果の確認のために別途資料購入した「上の坂」資料である。このことについては、のちにポスターで発表した。

【令和02年度(2020)】前年度からの継続作業となる。なお、撮影については、研究の当初より、保存油画研究室で撮影機材・資材を借用して行っていたが、コロナ禍で、所属研究室以外での活動には物理的・心理的に負担があり、全点撮影の目標を大きく後退せざるを得なかった。コロナ

が長引く見直しをつけて早めに、資材の購入に踏み切るべきであったと、2022年の現在になれば感じている。ただし、平成31年度末から令和2年度については、大学に入構することが困難な場面もあり、特に、外部研究者との交流が制約を受けた時期である。

【令和03年度(2021)】もとは3箱の中性紙箱に収められた泥絵資料について、そのシリーズとナンバリングを考慮して箱を増やして、再収納を行った。箱・梱包資材とも科研費で購入したものである。なお、収納スペースの問題から、1点ごと薄葉に挟む方法で箱に収めた。この再収納によって、改めてナンバリングの確認を行っている。

泥絵のモチーフ・絵画表現に関する研究

- ・地域的視点(ビューポイントの解明を目指して)
- ・その他モチーフとの比較(特に関西系泥絵との比較)
- ・表現手法の研究、遠近法など

【平成31年度(2019)】まずは、共同研究者である一宮八重・田口智子氏と、筆者の泥絵に関する知見・情報を共有することからはじめた。

【令和02年度(2020)】1点ごとの作品調査の成果に報告の場を設ける。R3年度までを視野に、美術史における泥絵の位置づけを行うため、美術史研究者との研究交流を深める。

【令和03年度(2021)】

泥絵の材料科学的分析

- ・支持体としての紙材料
- ・顔料(土人形との比較も行う)

【平成31年度(2019)】この年は、まずは、共同研究者である一宮八重・田口智子氏と打合せを重ねながら、泥絵の総体や、コレクションの状況、また、これに関する分析等の見直しについて話あった。そこで、「上の坂」の購入を行い、分析調査を進めて、上記の成果発表につなげた。なお、これに成功したことで、その先のコレクション全体を対象を広げる形での自然科学分析の実施に踏み切った。

【令和02年度(2020)】大学に入構は困難となったが、入構可能な時期に、自然科学分析調査について、非破壊を前提に実施した。外部メンバー(芸大所属以外)の入構が厳しい時期であり、主要メンバーで行える色材分析を進めた。分析資料は、主として水本の方で資料の選定を行い、分析は一宮八重を中心に田口智子に加わり、調査測定個所と方法については、3名で適宜相談して進めた。紙資料については課題でありながらも、ここでは保留した。

【令和03年度(2021)】この年については、改めて研究の方向性・テーマ性について相談を重ね、結果として、まず、「上方泥絵」あるいは「伝司馬江漢」など記名作品について、一定の分析を行うものとした。このうち「上方泥絵」の側定は終了し、現在、論文化を進めている。紙資料については、本科研費の最後のタイミングで、紙の研究者に実見を依頼して、シリーズごとに異なる材料である見直しをたてることができた。今後とも紙材料についても着目していきたい。

泥絵の保存方法の確立を射程とした予察的な研究

- ・泥絵の保存法の改善
- ・泥絵の保存環境の改善

【平成31年度(2019)】渡辺紳一郎氏旧蔵コレクションは、結果として、代表者が科研費で購入したが、購入が進むまでに、保存環境を検討することが難しかった。

【令和02年度(2020)】コロナ禍で、ほかの部分の研究に遅延や困難が生じる中で、この部分については、かえって新たな知見が得られた。これは、コロナ禍のなかで、感染拡大防止の観点から、研究室同士の交流が厳しい中であって、どうしても一時的に保存環境を整えつつ研究を進めることが必要となったことで、下記の新たな知見を得た。夏場の高温多湿と冬場の低温乾燥の環境条件を整えるために、調温調湿機能付きの保管庫と調湿材・保存箱等を組み合わせることで、環境改善が可能になる見直しをつけた。これを確認するため、データロガーや環境確認のための資材を購入し、環境に関わる調査研究を進めた。なお、このことについても、資料を入れない予備実験も実施し、安全を確保の上で行っている。

【令和03年度(2021)】環境に関わる調査を継続し、方法として提案できる見直しを得ている。現在は研究ノートの準備中である(一部、記事としてとりあげた)。なお、この方法については、四季のある日本の環境下で、個人住宅で保管されている文化財をどのように扱っていくかについて重要なヒントになると考える。この方向での研究については、改めて考えていきたい。

渡辺紳一郎氏コレクション形成に関する考察

- ・コレクション全体観
- ・ヨーロッパにて当時収集可能であった作品を追う。渡辺紳一郎氏の足跡と交友。

【平成31年度(2019)】2019年、借入金であった所蔵者急逝に伴い、2020年度に資料購入の運

びとなる。このことで、資料の借用関係の精査を行っており、一時的には資料調査を中断した。なお、結果として、この所蔵者の生前にうかがった泥絵と渡邊紳一郎氏のコレクション形成に関わる情報は、くしくも同コレクション形成に関わって重要な意味を持つこととなった。また、目黒区美術館に藤田嗣司の絵具箱、國學院大學大学博物館にアイヌ関連資料など、渡邊紳一郎氏の旧蔵コレクションを、博物館・美術館の収蔵へとつなぐきっかけにできたことについては、本研究の主要な内容からははずれるものの、日本の博物館・美術館活動においては大切な成果と感じている。

【令和02年度(2020)】コレクション購入。なお、併せて、借用していたコレクションのうち、小田野直武の5作品については秋田千秋美術館に収蔵されることとなった。それ以前に、筆者らは、肉眼観察とデジタルカメラ撮影、赤外線撮影、を使用した調査を敢行した。この成果については、いずれ関係機関の許可を得て、公にしたいと考えている。

【令和03年度(2021)】渡邊紳一郎氏旧蔵コレクションの形成については、その総体とともに、日本と海外の記録類の整理などを行って進めたいと考えていたが、これについて、氏の書籍類を手入して、これを調査継続中である。

(3)成果のまとめ

泥絵については、色材調査のうち「上方泥絵」については、おおむね測定は終え、今後の公表に向けて作業を進めている。自然科学分析の結果等、新規性もあるので、これは論文化ののちに総論を語りたい。また、例えば、ウルトラマリンプルーなど、ひとつの色材に対しても、興味深い成果があったので、これはこの先にさらなる研究深化をさせていく。

本研究では、目標とした、いくつかの柱について、調査研究が進んだが、予定外の要素が大きかったため、もっと全体的に進んでから書籍化すべきである旨、判断した。特に、海外調査、国内でも遠隔地の調査については、今後、時機を待って実施したいと考えている。ただし、コレクションの科研費購入に踏み切ったことで、大学内で実施可能な調査が飛躍的に増えており、特に、熟覧調査、自然科学分析、保存性の改善については、大きな成果と今後の研究可能性の拡大につながっている。

泥絵という絵画のジャンルへの貢献、また、より一般的には、国内に所蔵されている個人住宅における文化財保存への見通しをつけられたことで、一定の成果があったと自負する。今後は、コロナ禍で実施困難となったヨーロッパ調査(パリ・オランダなど)、秋田市千秋美術館など国内美術館所蔵の泥絵関連の絵画、でも調査を敢行し、科学史、絵画史、コレクション形成史についてさらなる研究の深化を図っていきたい。

研究成果の公表については、取得データが多いため整理を行っており、今後とも、ひとつひとつの取得・測定データを精査しつつ、論文化等を行っていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 一宮八重・田口智子・水本和美	4. 巻 なし
2. 論文標題 個人所蔵資料の保管整備に向けた取り組み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『藝術資源保存修復センター活動報告書』東京藝術大学芸術資源保存修復センター	6. 最初と最後の頁 16-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水本和美・暮品真理・一宮八重・塚田全彦・新免歳靖	4. 巻 なし
2. 論文標題 四谷一丁目遺跡出土の青色物質の自然科学分析と考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新宿区四谷一丁目遺跡 第3分冊（発掘調査報告書）	6. 最初と最後の頁 210-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 水本和美
2. 発表標題 江戸文化の研究と自然科学分析「ウルトラマリンブルー」（考古）と「泥絵」（絵画）～2つの研究を中心に～
3. 学会等名 第5回 文理融合シンポジウム「量子ビームで歴史を探る」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 水本和美、ジラルデッリ青木美由紀
2. 発表標題 トルコと江戸（江戸と江戸城）
3. 学会等名 トルコと江戸（自主企画）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口智子、一宮八重、水本和美、桐野文良
2. 発表標題 泥絵「上の坂」の材料分析（ポスター・アブストラクト）
3. 学会等名 日本文化財科学会 第36回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	一宮 八重 (ICHIMIYA Yae) (40832613)	東京藝術大学・大学院美術研究科・研究員 (12606)	
研究分担者	田口 智子 (TAGUCHI Satoko) (90755472)	東京藝術大学・大学院美術研究科・研究員 (12606)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	降旗 千賀子 (FURIHATA Chikako)	東京藝術大学・大学院美術研究科・客員教授 (12606)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 トルコと江戸	開催年 2019年～2019年
------------------	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------